

9 3 0 0 4

# 「新しいアジア」に向けて

—新しいアジア委員会報告書—



笹川平和財団

“新しいアジア”に向けて

## 新しいアジア委員会報告書一九九四年

イマジネーション豊かな新生アジア委員会メンバーであり、われわれと同様、アジアの再生を確信していた故大来佐武郎氏の霊に本書を捧ぐ。

# 目次

日本語版の発刊にあたって

まえがき

新しいアジア委員会構成メンバー

第一章	「議論の前提と諸原則」	1
第二章	「協力による安全と平和に向けて」	22
第三章	「諸権利の獲得と責任の発揮」	39
第四章	「生産的、持続的政治デモクラシーおよび法の支配に向けて」	57
第五章	「生産性向上、競争力強化のための努力」	71
第六章	「ダイナミックで、活力ある、持続可能な経済成長——社会正義を伴いつつ」	88
第七章	社会の、人間心理の変革を目指して	101
	委員会メンバー略歴	114

## 日本語版の発刊にあたって

東アジアのダイナミズムが世界の注目をあびだして久しい。歴史の客体としてのアジアから主体へという動きが、アジア各所におこりつつある。

笹川平和財団は、この動きに着目し、現時点における域内の共通認識を確認する作業を行いたいと考えた。平成4年プロジェクト発足にあたり、マレーシア戦略国際研究所長のノーティン・ソビー氏に、リーダーシップをとっていただくことを快諾していただいた。アジアの委員会を構成するにあたり、当財団から枠組みとして提示したのは以下の二点である。一つは、社会に大きな影響力を持つ人達を自由な立場でメンバーとして参加していただくこと。もう一つは、アジアを地理的に広く解釈し、インド等を含み、豪州参加の可能性も考えること、であった。

この委員会の作業は、かなり困難ともなうことが予想された。しかし、ノーティン・ソビー氏のリーダーシップと参加者の協力はすばらしく、短時日のうちに、このコンセンサス・レポートがつくられた。

ここに日本語版を作成し、日本の方々にアジア問題についての議論に一つの材料を提供したいと思う。アジアの友人達の問題意識理解の一助になれば幸いである。最後になったが、日本語版の作成のための翻訳作業において、藤本直氏の助力を得たので、ここにおいて謝意を表したい。

平成六年十月

笹川平和財団理事長

入山 映

## まえがき

一九九二年二月一九日、アジア各国からクアラルンプールに集まってきた学者、専門家たちは、新しい組織「新しいアジア委員会」を旗揚げした。この旗の下に集合したメンバーたちは、広大なアジアをほとんど網羅する広い地域、出身地から集まってきただけでなく、思想・信条・宗教の領域でバラエティに富み、過去の経歴・活動歴という面でも多岐にわたっていた。

委員会発足後、四度の会議がもたれ、一年の歳月を経て、とんとん拍子にまとめられたのが本リポート『新しいアジア』に向けてである。一部の者は本書の位置づけについて、「二〇二〇年アジアの一大ビジョン」だと言い、他の者は「将来のアジア、よりよいアジアに向けてのロードマップ」であると歓迎、さらには「アジア・ルネッサンス宣言」だとぶち上げ、声さえ出現するにいたった。しかしアジアには、謙譲の美德というものが存在する。もっと抑制された姿勢があつてしかるべきであろう。

委員会のメンバーであるわれわれは、現在、静かな自信に包まれている。ここに披瀝されたささやかな知的作業の結果が、間違いなく現実のアジアの姿とも、そしてまた、来るべき新しい時代とも、無理なく一つになっていると信じるからである。

理念や理想といったものは、社会的なうねり、力強い客観的流れに出会ったとき、大きな力を発揮する。アジア・ルネッサンスを指向するわれわれの観念、思考の数々も、すでに始まっているアジアの滔々とした流れと決して無縁ではない。やがて人類の歴史に一つの回帰が見られることとなるであろう。すなわち、かつて人類文明揺籃の地であったアジアが、再び立ち上がることになるのである。

微力ながらわれわれの努力の結果がこの歴史の回帰に、そして新しいアジアの到来にいささかでも貢献し得るなら、望外の喜びというものである。

一九九四年一月一三日

「新しいアジア委員会」座長

ノーディン・ソピー

## 新しいアジア委員会構成メンバー

1. Mr. CHEONG Yip Seng  
マレー新聞英語版 (『シンガポール・プレス』所有) 編集長  
シンガポール
2. Dr. Gennady CHUFRIN  
科学アカデミー東洋学研究所副所長  
ロシア連邦
3. H.E. Nguyen CO THACH  
元副首相、元外相  
ベトナム社会主義共和国
4. H.E. Dr. Jesus ESTANISLAO  
元財務長官  
フィリピン
5. Prof. Stephen FITZGERALD  
アジア・オーストラリア研究所所長  
オーストラリア
6. Air Commodore Jasjit SINGH  
防衛戦略分析研究所所長  
インド
7. Mr. Saburo KAWAI  
国際開発センター会長  
日本
8. Dr. David K. P. Li  
東アジア銀行総裁  
香港

9. Dato' Dr. NOORDIN Sopiee (座 長)  
マレーシア戦略国際問題研究所所長  
マレーシア
10. H.E. Dr. Saburo OKITA  
元外相 (日 本)  
(1992年12月19日より1993年2月9日まで委員として在任)
11. Dr. PU Shan  
中国世界経済協会会長  
中華人民共和国
12. Prof. Mohammad SADLI  
元人的資源相、元鉱物石油資源相  
インドネシア
13. Prof. Rehman SOBHAN  
政策対話センター理事長  
バングラデシュ
14. Prof. M. R. SUKHUMBHAND Paribatra  
チュラロンコン大学政治学部準教授  
タ イ
15. Dr. Kazuo TAKAHASHI  
笹川平和財団 (S P F) プログラム・ディレクター  
日 本
16. Prof. YUAN Ming  
北京大学国際関係研究所所長、同研究所教授  
中華人民共和国

## 謝 辞

当報告書は、笹川平和財団による資金援助を得て完成された。

## 第一章

### 「議論の前提と諸原則」

アジアの地は広大である。地球の全陸地面積の三分の一を占めるだけでなく、世界人口の二分の一を擁している。

したがって、この地の様相が諸大陸の中で最も複雑なものとなったとしても驚くには当たらない。アジアの総面積は四四〇〇万平方キロ、北は極北の地から南は熱帯地方にまで広がる一方、東端はロシアの極東地域からインドネシアにいたる長大な太平洋沿岸部、そして西端はウラル山脈からアラビア半島にいたる地域にまで及んでいる。そしてここを舞台に、人種、宗教、文化を異にするだけでなく、政治、経済、技術、社会発展などの諸分野でそれぞれ多様な成熟段階を示しながら、二十五億人以上の人々が生き、生活しているのである。

このアジアを経済的観点から見ると、現在、世界輸出総額の二五パーセント、世界輸入総額の二二パーセント、国際準備金総額の三三パーセントを占めている。さらに現在までのところ、最も高い経済成長を示しているのがこのアジア大陸なのである。一九八〇年代の一〇年間を振り返って

見るなら、OECD各国の経済成長が三・一パーセント、ラテン・アメリカ、サブサハラ・アフリカ地域の成長がそれぞれ一・六パーセント、二・一パーセントであったのに対し、東アジア、南アジアの経済成長率はそれぞれ七・八パーセント、五・二パーセントに上っている。これから一世代の間、アジアの経済成長が五・六パーセントの水準で推移していくとするなら、一九九〇年の時点で総額五兆ドルのレベルにあったわがアジアのGDPは、二〇二〇年に二一兆ドルから二八兆ドルの規模にまで拡大すると期待される。相互経済交流による相乗効果をねらい、全体の流れをうまくコントロールするなら、アジアが二一世紀に世界の経済センター化するのほとんど疑いのないところと言ってよい。

「新しいアジア委員会」から提出される初の報告書であるこのレポートが目的とするところは、次世代における「新しいアジア」像を、すなわち、すべての国々とまではいかないにしても、この広大な大陸に属する大部分の国々が関与し得る、そしてこれらの国にとって意味のあるビジョンを明らかにすることである。当りपोर्टでは以下、二〇二〇年という時に向けてアジアは何を目指し、どのような姿を求めて進むべきか、またこの一世代の間われわれ自身何をなすべきなのか、といった問題が議論される。

人類史を振り返ってみれば自明の通り、アジアは過去しばしば人間そのものに、そして人間社会に大きく貢献してきた。われわれは今こそ、アジアが再び自分の足で立ち、一層の高みを目指し、